

尿沈渣中にキサンチン結晶様の結晶成分を認めた2症例

◎片沼 晶子¹⁾、梅野 詳子¹⁾、橋本 英奈¹⁾、横田 綾¹⁾
国立大学法人 富山大学附属病院¹⁾

【はじめに】キサンチン結晶は、腫瘍崩壊症候群 (tumor lysis syndrome; TLS) に投与されるキサンチンオキシダーゼ (XO) 阻害薬の作用により生成され、閉塞性腎障害を引き起こす原因となる臨床的意義の高い結晶である。しかしながら 2019 年に初めて形態的特徴が報告された新たな結晶であることから、報告例が少なく、エビデンスの蓄積が必要な結晶成分である。今回我々は、XO 阻害薬使用例と非使用例において、尿沈渣中にキサンチン結晶様の結晶成分を認めた症例を経験したので報告する。【症例】(症例 1) 33 歳、女性。急性白血病疑いにて緊急入院。TLS 疑いのため入院 2 日目よりフェブリク錠内服、ラスリテック投与開始。(症例 2) 49 歳、男性。大量飲酒による意識障害のため救急搬送、発熱、全身痙攣あり、髄膜炎疑いのため緊急入院。【尿検査所見】(症例 1) 定性: PH 6.5、比重 1.021。結晶: 黄褐色の板状結晶(1+)。溶解性: アルカリで溶解、酸で不溶。結石分析: 同定不能。(症例 2) 定性: PH 5.5、比重 > 1.050。結晶: 黄褐色の板状結晶(1+)、尿酸結晶(1+)。溶解性: アルカリで溶解、酸で不溶。結石分析: 未実施。【考察】症例 1、2 ともに

「不明結晶(キサンチン結晶疑い)」として溶解性と臨床的意義を併せて報告した。症例 1 は、結晶出現の報告により XO 阻害薬の投与が中止され、その後、結晶が陰性化したことからキサンチン結晶であった可能性は高く、迅速な臨床への報告により腎障害を防ぐことができた。一方、症例 2 は、XO 阻害薬非使用であり、同時に尿酸結晶も出現していたこと、また、キサンチン結晶に酷似した尿酸結晶の報告もあることから、結晶は尿酸結晶であった可能性も考えられた。【まとめ】キサンチン結晶の出現は、XO 阻害薬投与を中止すべきことを示唆する重要な所見であり、迅速な臨床への報告が重要である。同時に、臨床的にはまだ認知度が低い結晶であるため、その臨床的意義を併せて報告することが望ましい。また、同定不能な結晶成分であっても、その出現と溶解性を報告することが腎障害の予防に繋がることに変わりはなく、同様に臨床への迅速な報告は必要である。今後、検査室で実施できるキサンチン結晶の鑑別方法を確立することにより、より有用な臨床への報告が可能となると考える。連絡先: 076-434-2281(内線 7757)